

# 野田物語

棋士・渡辺東一 ⑤  
生涯で  
忘れられない対局



渡辺七段との決勝対局  
実弟の訃報を悼みに深く悲しめて  
弟の死を乗り越えて七段戦に優勝したことを報じる新聞／資料提供 渡辺桂三氏



良助と思われる写真(昭和9年)／写真提供 渡辺桂三氏

昭和13(1938)年から同15(1940)年5月まで繰り広げられた「第二期名人戦」は、「第一期」で名人に決まった木村義雄に挑戦する相手を決める戦いとなりました。挑戦者決定戦は、前期に不振だった木見金治郎を除き、八段の土居市太郎、金易二郎、花田長太郎、金子金五郎、神田辰之助、萩原淳、斎藤銀次郎に加えて、特別参加の阪田三吉、そして、七段からは1人だけが参加できるルールでした。

当時、渡辺を入れて7人の七段が、全員で二局ずつの総当たり戦を行いました。その結果、最終的に残った渡辺と塚田正夫が三番勝負を行い、勝った方が「挑戦者決定戦」に参加できることとなりました。三番勝負の第一戦は渡辺が、第二戦は塚田が勝ち、同13年8月17日、運命の第三戦が始まりました。しかし、第一日目を指し掛けて(勝負の途中で一時中断すること)帰宅した渡辺を待っていたのは、一番下の弟・良助急死の知らせでした。当時の新聞は、「渡辺七段も一番愛する弟として特に目をかけてゐた。けに指繼ぐ氣力を失ふほどの衝動をうけ一旦は停戦を申出でようとまで思つたが棋士の本分にそむくことを悟り電報を胸に對局場に臨み齒をくひしばつてひきしめ戦ひ抜くこと百數十合、十九日早晩双方持時間一分を残す大將棋の後、見事榮冠をかち得、勝敗決定後初めて塚田七段に弟の死を告げ

たので、塚田七段も渡邊七段の美しい心事にいたく感激し涙さへ浮べて握手しながら渡邊七段の健闘を祝したのであつた」と伝えていきます。また、大阪毎日新聞には「私(中村完一 観戦記者)は、渡邊七段の愛弟の死を(塚田七段に)話すと「さうですか…」と深くうなづいて「よく指せたなア」とひとりごと。(対戦を終えて風呂上りの)渡邊七段、タオルで頭をふきふき「お先へ——塚田君入れよ」「いや、僕は止さう、しかし…」とあとは口ごもつて、渡邊七段の肩に手をかけた。(中略)「今聞いたんだが、…ちつとも知らなかつた、よく…」とあとは聞こえなかつたが、よく耐へて指したといふ心であらう。二人は固く手を握り合つてゐた。ともに両眼にきらめくものがあつた。あ、劇的のその握手」とあります。そして渡辺は、七段からだ1人、「第二期名人戦」への挑戦者となりました。 ※文中敬称略(次号へつづく) 【取材協力】足達龍也氏、佐藤良夫氏 【参考資料】「将棋百年」山本武雄(時事通信社)

## 6月の休日当番医

休日当番医での診療時間  
外科・産婦人科 = 9時～22時(ただし16時～19時は除く)  
内科 = 9時～16時(19時～22時は急病センターで行います)

日(曜日)	外科	内科	産婦人科
4日(日)	東葛クリニック野田(☎7124-3101)	新村医院(☎7138-2103)	遠藤産婦人科医院(☎7124-7860)
11日(日)	須藤整形外科(☎7122-1221)	小林医院(☎7122-2835)	杉崎クリニック(☎7125-1070)
18日(日)	キッコーマン総合病院(☎7123-5911)	丹保医院(☎7129-3557)	川間太田産婦人科医院(☎7127-1135)
25日(日)	東武川間クリニック(☎7129-1365)	小澤医院(☎7122-3980)	キッコーマン総合病院(☎7123-5911)

※休日当番医は変更することもあります。受診の際にはテレホンガイド(☎7124-7272:コード6101)、または野田市ホームページ(<http://www.city.noda.chiba.jp/kurashi/04-01-01.html>)で確認をしてください。

## 急病センター ☎7125-1188

▼内科(小児科) = 19時～22時(毎日)  
▼歯科診療 = 9時～正午(休日)

▼「団塊の世代」と言われる方々が、定年退職されて地元に戻ってくる。野田市では約1万人の方が該当する▼定年後の新たなライフステージを迎えるにあたり、地域に貢献しながら楽しめるような、生きがいを感じられるような「質の高い生き方」を見つけていただくために、市では、その方々が活躍できるようにさまざまな分野を総合的にサポートするシステムを構築し支援をしていく▼地域にスムーズに溶け込んでほしい、長い間の仕事で培ってきた豊富な知識や経験を活かし、生き生きと地域で暮らし続けていただきたいと願う。…おかせりなさい (0x)

**編集後記**

市の木

けやき

市の花

つつじ

市の鳥

ひばり